

主催者挨拶

川田 都樹子

本日はご来場くださりまして、誠にありがとうございます。前半の司会を務めさせていただきます川田です。よろしくお願ひいたします。

さて、本シンポジウムは、「美と病のトポロジー——芸術療法の過去・現在・未来——」というタイトルを掲げております。ちょっとわかりにくいタイトルかもしれませんが。トポロジーとはそもそも何なのでしょう。もともとトポスとは位置あるいは場所という意味ですから、直訳しますと位置に関する学問だということになります。もう少しわかりやすく言えば、物のつながりぐあいに注目し、その位相、位置関係を明らかにしようとする学問だということになるでしょう。このシンポジウムのタイトル、「美と病のトポロジー」では、「美」という一語に芸術あるいは表現行為、創作行為の意味を、また「病」の一字には特に心理臨床や精神医療の対象になるものというような意味を託しました。このシンポジウムではそれら両者のつながり方、あるいは関係性を探っていくというわけですね。

ところで、昨今は「癒し」という言葉が流行していると思います。と同時に、「○○セラピー」という語もよく耳にいたします。セラピー文化と呼ばれるような風潮さえあると言えるでしょう。そうした中で、芸術療法あるいはアートセラピーもまたさまざまな形で発展してまいりました。絵画療法、コラージュ療法、音楽療法、ダンス療法といった個々の技法に関しては、最近では理論的、技法的に整備され、その意義が実証的に検証されるようになってきたように思います。

しかし、これまで臨床や福祉といった実践的領域と、芸術そのものを論ずる学問領域とは互いに連携する機会がほとんどありません。今改めて、芸術あるいは表現行為は私たちにとってどのような意味を持つのか、特にそれが心の病とその治療にいかん、またなぜ関わるのかを問い直してみるべきでしょう。

そこで、甲南大学人間科学研究所では、研究プロジェクト「芸術学と芸術療法の共有基盤確立に向けた学際的研究」を立ち上げ、この問題に多角的にアプローチしてまいりました。現在、研究所では四つのプロジェクトが同時進行中です。私たちのプロジェクトはその中の三つ目ということで、普段はP3などと呼んでおります。では、これまでP3でどのような研究が重ねられてきたのか、簡単にご紹介しておきたいと思っております。このP3は、実に多様な領域の専門家によって構成されており

ます。お手元のプログラムの中にメンバの簡単な紹介がありますので、そちらも併せてご覧いただければと思います。

（公開研究会のチラシを写真しながらの紹介。）最初の研究会「アートセラピー黎明期のアメリカの例に学ぶ」（二〇一〇年六月一九日）では、内藤あかね先生と私が、アートセラピーができる以前、できる頃のアメリカに焦点を絞ってお話ししました。内藤先生はアメリカでアートセラピーをご専門に勉強してこられました。研究会ではアートセラピーの母とも言うべきナウムブルクについてお話しくださいました。私のほうはちょうど同時代に、画家ジャクソン・ポロックが受けた精神分析的な治療について芸術学の立場からお話ししました。

第二回目の研究会「アートセラピーにおける表現と癒し」（八月七日）では、やはりアメリカでアートセラピーをご専門に学んで来られた市来百合子先生から、パオロ・クニル氏のエクスプレッシヴ・アーツ・セラピーについてのお話をお聞きしました。また、音楽史がご専門の高岡智子先生から、「音楽は人を癒す」という一九世紀以来の一つのクリシエについてお話しをいただきました。

次に、芸術学の石原みどり先生と臨床心理学の宮川貴美子先生から、「アートセラピストに聞く——一〇のインタビュアーが見える芸術療法の諸相、芸術学との距離」（一〇月二日）のご報告をいただきました。このP3ではアートセラピーの現状

を把握するためにアンケート調査とインタビュアー調査も行なつてまいりました。本日、この会場にも調査にご協力くださった方がお見えになっていきます。その節はご協力、誠にありがとうございます。この調査研究に關しましては、本日も後ほど報告できると思いますが、本日は時間の都合上、一部分しかお伝えできません。詳細は、本年度中に報告書にまとめて発表する予定でありますので、是非そちらをご覧ください。

当研究所所長の港道隆先生からは、「カタルシスの系譜」（二月一七日）として、哲学的な非常に広い視野からのお話しをうかがいました。カタルシス、心の浄化という概念は芸術療法でしばしば言われるところですが、このカタルシス概念が哲学的に、また歴史的にどのように展開して今日に至ったのかをお教えいただきました。

それから、二日連続の研究会「芸術療法をめぐる文化、歴史、医療」（二〇一一年三月七日・八日）では、実にさまざまな方向からのお話を聞きました。例えば今井真理先生は芸術療法の専門家であり、また脳や神経についても最近のご研究を深めておられ、非常に興味深い事例報告をいただきました。また小林昌廣先生は実は医学部のご出身で、今は医療人類学と芸術論、特に身体表現論をご専門にしておられますが、ご発表は「セラピーとしての舞踏——土方巽の肉体論」でした。本日後半の司会者でもある西欣也先生は、哲学的な観点から「セラピー文化

における芸術と自己」について、実に包括的なお考えをお聞かせくださいました。また、のちほど講演くださいます服部正先生は、兵庫県立美術館の学芸員であり、アウトサイダー・アートの専門家でもあり、「アウトサイダー・アートとセラピー」との関係について。また安齊順子先生は心理臨床のご専門家で同時に心理学史の研究もしておられ、日本における芸術療法の歴史を。また、後ほど講演いただきます三脇康生先生は精神医療のご専門ですが、現代芸術の美術批評も書いておられ、独自のご見解をお聞かせくださいました。

次の「芸術は自己表現か?——智恵子、光太郎がいた場所」(六月二十五日)は、後ほどご講演をいただきます木股知史先生のご発表でしたが、木股先生は日本近代文学のご専門で、文学と美術との関わりを中心に研究していらっしやいます。

最後に本シンポジウムの事前研究会として開催しました「智恵子の主治医? 斎藤玉男とは」(九月八日)で、三脇先生にご報告をいただきました。

さて、これらの研究会でも終盤でテーマとなっておりました高村智恵子、その最晩年の作品である紙絵は、現在この会場の隣、甲南大学ギャルリー・パンセでご覧いただけます。高村光太郎の詩集『智恵子抄』にも描かれておりますとおり、智恵子は精神分裂病、今言う統合失調症になって精神病院に入院し、そこで亡くなりました。紙絵はすべて入院中に制作されたもの

です。智恵子が紙絵を作った昭和十一年から一三年には、まだ芸術療法なるものは概念としても技法としても確立してはいません。

入院中の智恵子に関する資料は数少ないものですから、この紙絵の制作が医師による治療と何らかの関わりがあったのか、または制作行為が症状の緩和と何らかの役に立ったのかといったことも詳細まではわかりかねます。しかし、智恵子と紙絵作品、その解釈のされ方、また当時の医療制度や臨床のあり方、さらにはちょうど同時代に注目を集め始めました障がい者アートの解釈など、さまざまな方向から検討を重ねることによって、智恵子のいた時代、日本近代の「美と病のトポロジー」を探ることができるとでしょう。そして、そこから見えてくるさまざまな問題は、今日私たちの時代にもなお改めて問うべきことを含んでいるように思います。

そこで、このシンポジウムは次のような構成になっております。まず、智恵子の時代に話題を絞りまして、お三人の先生にそれぞれの立場からご講演いただきます。そこから後半第二部の討論へ展開可能なトピックスを、その都度抽出して整理していこうと思います。

休憩を挟みまして後半には、前半に抽出したさまざまな話題について、今度は地域も時代も限定することなく、P3のメンバーが自由に論じてまいります。そこにぜひとも会場の皆さま

も一緒にご参加ください。積極的なご発言を期待しております。
どうかよろしく願います。